

150周年記念社会貢献事業

ボルネオ島での熱帯林再生及び生態系の保全プログラム



ITOCHU Group Forest for Orang-utan

世界的に問題となっている熱帯林の著しい減少・劣化、及びそれに伴う生態系の破壊は、1992年のブラジルで開催された地球サミットでも指摘されてきましたが現在も止まっていません。また、森林の破壊が地球温暖化の原因である二酸化炭素増大の原因のひとつともいわれています。

ボルネオ島（カリマンタン島）はマレーシア・インドネシア・ブルネイの三カ国にまたがる熱帯林地域で、日本の約1.9倍もの面積がある、世界で3番目の大きさの島です。アマゾンなどと並び、生物多様性の宝庫といわれるボルネオ島も最近の開発が進み、自然再生力だけでは生態系保全ができない程、傷ついた熱帯林も出てきました。今回のプログラムは、これらの傷ついた熱帯林再生の手助けをするものです。伊藤忠が支援する森林再生地のボルネオ島北東部のマレーシア国サバ州北ウルセガマでは、世界的な自然保護団体であるWWFが現地サバ州政府森林局と連携し、約2,400ヘクタールの森林再生活動を行っています。伊藤忠グループはそのうちの967ヘクタールの再生を支援するものです。当地は、絶滅危惧種であるオランウータンの生息地でもあり、森林再生によりこのオランウータンを保護するのみならず、ここに生息する多くの生物を守ることもつながります。



2011年12月末時点で、432ヘクタールの植林が完了しました。967ヘクタールの全植林は2012年以内に完了する見込みです。

熱帯林の再生には、長い時間がかかります。5年間だけでは十分ではありません。しかしこれをひとつの契機として、社員やグループ会社とも協力し、動物たちが安心して暮らせる森の再生を目指していきます。

プログラムの内容

寄付先	WWFジャパン
期間	2009年度より2013年度まで（5年間）
場所	ボルネオ島（マレーシア国サバ州北ウルセガマ地区）
面積	967ヘクタール（東京都港区の約半分の面積）
寄付金額	総額2億5000万円（グループ会社よりの寄付含む）
植樹	植樹は、現地の在来樹種のフタバガキ科が中心となり、現場状況にあった樹種が植えつけられます。5年をかけて植樹及びメンテナンスを実施します。
社員ボランティア活動	グループ会社を含めた社員ボランティアによる現地植林活動（植樹、草刈など）や野生動物の観察等を実施中

社員ボランティアによる植林活動



2年前に植えた膝丈だった苗木もここまで生長しました。



伊藤忠のサインボードの前で丁寧に植樹

WWFのプログラム概略

■ ボルネオ島北ウル セガマ森林再生活動～蘇れ！絶滅危惧種オランウータンの森～

趣旨

マレーシア・サバ州で保全優先度が最も高く、劣化が激しいため人為的な森林再生活動が必要となっている地域2400haで、植林活動を行う。

場所の重要性

ボルネオ島にはオランウータンをはじめとした固有の動物や多種多様な植物が生息しており、生物多様性の宝庫のひとつである。ボルネオ島の象徴的ほ乳類であるオランウータンを例に挙げると、この霊長類はボルネオ島とスマトラ島にのみ生息する絶滅危惧種で、WWFでは2005年、ボルネオ島の中で特に優先度の高いオランウータンの生息地をインドネシア領3地域とマレーシア・サバ州と設定した。サバ州の中でも特に重要な地域が次の5ヵ所である（重要度順）。

オランウータンの生息頭数の減少は、森林面積の全体的減少並びに森林の分断によるものであり、その生息地を確保することはボルネオ島の森林生態系保全に直結している。



オランウータン生息地
© WWF Japan All Rights Reserved.

地域	面積 (km ²)	生息頭数
ウル セガマ マルア	3,000	5,000
キナバタンガン北	1,400	1,700
タピン野生生物保護区	1,200	1,400
キナバタンガン下流域	400	1,100
クランパ野生生物保護区	210	500

活動の重要性

最重要地域のウル セガマ マルア (USM) 地域は、1960年初頭から木材用伐採が始まったが、2008年1月以降伐採は停止され、サバ州政府はUSM森林管理10年計画策定チームにWWFマレーシアを招聘した。このように保護の機運が高まり保全活動が進めやすい環境で事業を進め、以下の4つの目標を達成する。

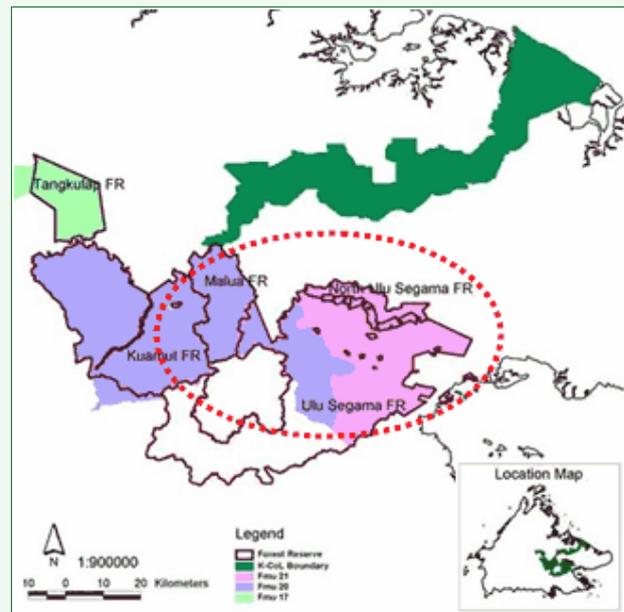
1. 多様な種が生息する低地フタバガキ林を復元し、生物多様性と遺伝子の保護を図る
2. 大型ほ乳類と希少植物の生息地を長期的に確保する
3. 固有植物種を絶滅の危機から救う
4. 分断された森林をつなぎ、野生動物がより広範囲に移動して、餌を入手できる環境を長期的に確保する

活動場所

ウル セガマの中でも、特に森林の劣化が激しい北ウル セガマは、約90頭のオランウータンが生息しているが、劣化が激しすぎるため、植林・雑草抜き取りという人間の介入なしには森林再生が見込めない状態である。この地域の2400ヘクタールを森林復元場所とした。ウル セガマ地域は商業利用が可能な森林保護区であり、他の森林保護区同様、サバ州森林局 (SFD) の所有地である。WWFはすでにここに現地事務所を開設、オランウータンのモニタリングチームも置いている。対象地域は3ブロックに分割され、内1ブロックは

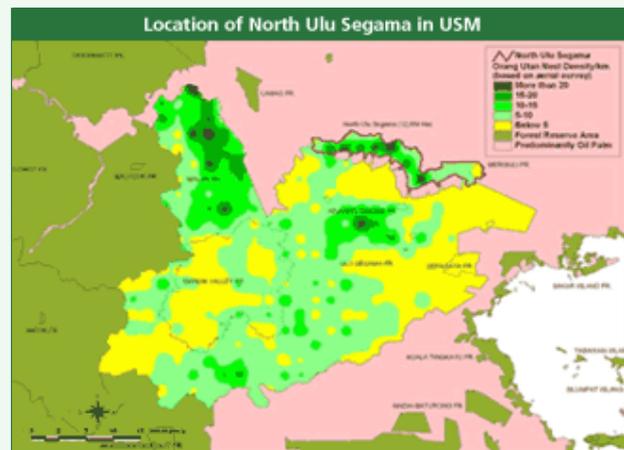
- Mark & Spencer (英国)
- Addesium 財団 (オランダ)
- WWF UK
- WWF Germany
- WWF US

からの資金を得て作業を開始した。



ウル セガマ マルア地域

© WWF Japan All Rights Reserved.



© WWF Japan All Rights Reserved.

植林される樹種の例：（実際には数多くの樹種が植えつけられます。）

種名 (現地名称)	学名	商業名
Laran	Neolamarckia cadamba (アカネ科)	ララン
Binuang	Octomeles sumatrana (ダディスカ科オクトメレス属)	ビヌアン
Seraya Kepong	Shorea ovalis (フタバガキ科サラノキ属)	セラヤ
Kapur Paji	Dryobalanops lanceolata (フタバガキ科リュウノウジュ属)	カポール
Seraya Tembaga	Dipterocarpus caudiferus (フタバガキ科フタバガキ属)	クルイン
Seraya Daun Kasar	Shorea fallax (フタバガキ科サラノキ属)	セラヤ
Kawang Jantung	Shorea macrophylla (フタバガキ科サラノキ属)	テンカワン
Selangan Jangkang	Hopea nervosa (フタバガキ科)	メラワン
Urat Mata Daun Licin	Parashorea mallanonan (フタバガキ科)	ホホワイトセラヤ
Seraya Daun Mas	Shorea argentifolia (フタバガキ科サラノキ属)	セラヤ
Seraya Punai	Shorea parvifolia (フタバガキ科サラノキ属)	レッドセラヤ
Seraya Kuning	Shorea kudatensis (フタバガキ科サラノキ属)	イエローセラヤ

ボルネオ便り 第3回

ITOCHU Group: Forest for Orang-utan の活動の地、ボルネオ島・マレーシア国サバ州にて社員並びにグループ会社社員の計14名が参加して2011年11月に植林体験ツアーを行いました。

現地の自然あふれる魅力と参加者がこのツアーを通して感じたことをご紹介します。



コタキナバル



ボルネオ島へのツアーの玄関口でもあり、商業都市としても発展する人口30万人ほどの街です。社員たちのツアーもこの街から始まります。WWFマレーシアの事務所もあります。

参加者より

初めて植林がただ単に木が少ないところに何か植えれば良いというのではなく、植える木の種類やその割合、間隔などさまざまなことを計算し考えたうえで行うものであることを知りました。また、植える際も根の回りをしっかりと土で埋めないと、そこに水が溜まって根が腐り枯れてしまうと、無事に根がついても引続きメンテナンスが必要だと聞き、この事業に関わる多くのスタッフの存在とその苦勞、熱帯林再生が簡単ではないこともあらためて認識しました。

北ウルセガマ



本プロジェクトの植林地です。967ha（約東京ドーム207個分）を支援し、森の再生を目指します。2011年9月末時点で424.19ha（約44%）の植樹が完了しています。

参加者より

植林エリアまでの道中は、管理区入口まではパームオイル産業植林エリアが延々と続いており、また植林エリアである管理区も、原木伐採を終えたままの2次林、3次林でした。マレーシアに経済成長をもたらしている産業に対し森林保護を理由に、一方的に抑圧することはできませんが、違った保護の方法も提案できるのではと感じました。森林再生には時間がかかると思いますが、より多くの方がこの気持ちに共感することこそ、一番の近道です。このツアーの継続とより多くの共感者の誕生を願います。

参加者より

「植林ってどんなふうにするんだろう？」と疑問に思っていました。自分で穴を掘って・・・と想像していたのだけど、実際はWWF現地スタッフが予め穴を掘って下さっていて、私たちは用意された苗木を植えるだけの作業でした。しかし、雨上がりの足場の悪い斜面で、中腰で粘土質の土を隙間なく詰め込む作業は決してラクなものではありませんでした。45分かかって植えたのは8本。「大きくなってよ～、“うーたん”のご飯になるんだよ～」と1本1本声を掛けながら植えました。そのお礼に出てきてくれたのかな、帰り道、野生のオランウータン親子にも会えました。

スカウ



キナバタンガン川を巡るクルーズで人気な場所で、ワニやテングザル等数多くの野生動物に出会えます。

参加者より

運良く野生のオランウータンの親子やボルネオピグミーエレファントの愛らしい姿に遭遇したり、ボルネオ島には日本では見ることのできない動植物、聞いた事もない鳥の声、虫の音が溢れ、実に生物多様性に富んだ地であることを強く感じました。この豊かな自然を守るための活動を参加者の皆さんと共有できたことは貴重な思い出です。

サンダカン



コタキナバルに次ぐ第2の都市です。1947年にコタキナバルへ首都が移されるまで、英国領北ボルネオの中心として貿易の拠点として栄えました。

参加者より

水上集落などという日本ではお目にかかれない生活様式を目の当たりにしながら、高台の寺院にまでバスで登ると綺麗な海を見渡せて、その陸地との境には古い家々が密集している風景があった。遠く見渡すと、深い緑が織り成すジャングルが続く。そこは言葉に尽くしがたい穏やかな空間がありました。

セピロック



絶滅の危機に瀕したオランウータンを野生に戻すための施設「オランウータン リハビリテーションセンター」があります。

参加者より

リハビリテーション・センターの見学を通し、オランウータンのDNAの96.4パーセントが人間と同じであることを学んだ。人間とオランウータンはとても似通った、近縁な関係にあることを改めて実感した。しかしながら、オランウータンには森を再生する力がない。この伊藤忠の森林再生プログラムは、その手助けをするのにとても重要な活動であるのだ、とプログラムの意義を改めて感じた。私たちの植えた木の上で、自然の中で暮らすオランウータンが食べたり寝たりする日が来るのを楽しみにしたい。

植林体験ツアー

■ ツアー日程 (4泊5日)

1日目	11月3日	前日羽田（深夜便）～コタキナバル（ボルネオ）（WWF事務所）～ラハダトゥ
2日目	11月4日	ラハダトゥ～ウルセガマ（植林地）～スカウ
3日目	11月5日	スカウ～サンダカン～セピロック
4日目	11月6日	セピロック（リハビリテーションセンター）
5日目	11月7日	セピロック～サンダカン～コタキナバル～羽田

■ 2011年12月時点の植林状況



2011年12月中旬時点で432.13ヘクタール（約45%）の植樹が終了し、現在は残り部分を作業中で、2012年末までには植林が完了する予定です。その後2014年7月まで現場でのメンテナンス作業が継続され、それ以降は自然生長となります。

■ 植林レポート

1日目 (11月3日)

羽田深夜便の飛行機で早朝のコタキナバルに到着しました。近くの野鳥保護区を観察してから、朝9:00にWWFマレーシア事務所に向かいました。事務所では森林保護についての手法と重要性、現在の進捗状況、オランウータンの調査方法等についてレクチャーを受け、活発な質疑応答がありました。その後、プロペラ機にてラハダトゥーに移動しました。



コタキナバルに到着した後、
水上集合住宅の見学



立ち寄った野鳥保護区



野鳥の観察中



現地WWF事務所での講義



プロペラ機でラハダトゥーへ

2日目 (11月4日)

熱帯雨林気候特有のスコールが前夜に降り、足元が心配されました。当日朝には何とか雨が止んで全員緊張の面持ちでホテルでの最後のミーティングを終え、いよいよ出発。街を抜け一面のバームヤシ農園も通過して、ついに植林現場に到着。



植林出発前の緊張感漂う
ミーティング



いざ植林地へ

伊藤忠が支援する森林再生地で一昨年、昨年と伊藤忠グループ社員が植えた苗木の成長を全員が目を確認することができました。今回植林地では5班に別れて、班ごとに20本程度の苗木を植えました。急な斜面での活動に皆、全力で8メートルの間隔をあけて、1本1本丁寧に土を被せて苗木を大切に植えてきました。



植林地で
WWF現地スタッフから
説明を受ける



今回の植林現場



心を込めて植えた苗木



急な斜面での作業



大変な作業でも笑顔がこぼれます



一年前に植えた苗木の下で



サインボード前での記念撮影



植林後、幸運にも野生のオランウータンに遭遇

植樹した木々の生長状況



2010年11月に植えた木も



2011年11月には
こんなに大きくなりました

3日目 (11月5日)

植林が無事に完了し、一行はスカウヘバスで移動。キナバタンガン川沿いのロッジに宿泊。リバークルーズにて沢山の野生動物達と遭遇。(オランウータン、テングザル、ピグミーエレファント、トカゲ達の大歓迎を受けました。)



モーニングクルーズ
岸沿いで動物を探す



モーニングクルーズ
大河を往く



野生動物 トカゲ発見



ジャングルの中をクルーズ



野生動物
ピグミーエレファントに遭遇



木の上には野生のテングザル



サンダカンに到着



丘の上からのサンダカンの風景

4日目 (11月6日)

午前中にマレーシア森林局の熱帯林施設を散策した後、セピロックにあるオランウータンリハビリセンターに訪問し、ビデオにてセミナーを受けたのち、オランウータンの食事風景を見ることができました。



オランウータン・リハビリテーション・センターにて



オランウータンに会えました

奇跡を起こした熱い思い



WWFジャパン
サポーター事務室
法人・募金グループ
小坂 恵

本ツアーも第3回を迎え、ご参加者をはじめ、事務局等ご関係者のお陰で無事に終えることができました。ご支援にあらためて御礼申し上げます。今回のツアーに同行し、ご参加者との交流を通して、伊藤忠グループの皆様の野生生物の保護や、地球環境の保全に対する意識の高さに驚くとともに、活動に携わる者として大変ありがたい気持ちでお話を伺いました。現地WWFスタッフによるプロジェクト説明の際には、深夜の移動でお疲れにも係わらず、熱心に耳を傾けられ、終了後には多数のご質問をいただいたことが印象に残っています。グローバルな事業展開をリードする、伊藤忠グループの社員ならではの、能動的な姿勢に頼もしさを感じた次第です。翌日に活動を控えた夜は激しい雷雨となり、植林の実施を心配しましたが、皆さんの熱意が天に届いたのか、当日は天候に恵まれて予定の植林作業等をすべて終えることができました。高温多湿な環境の中、数本の苗木を植えるだけでも重労働でしたが、どなたも真剣な表情で、1本1本を丁寧に植えられているお姿は誠に感動的でした。植林現場にオランウータンの母子が現れたという幸運は“自然からの御礼”ともいうべき、皆様が起こした奇跡ではないでしょうか。

伊藤忠奨学金制度

次代を担う外国籍留学生への支援

伊藤忠商事は創業150周年という節目の年を迎えるにあたり、海外から日本の大学へ留学する学生が、留学に関わる経済的負担を軽減されることで学業に専念し、将来日本と出身国の発展・関係強化に貢献することへの支援を目的として、「伊藤忠奨学金制度」を2009年に設立しました。

日本の大学で学んでいる海外からの留学生（大学3・4年生対象）20名～30名に対し、1名あたり年間150万円（1名に対し2年間援助／計300万円）の支援を行っています。

伊藤忠奨学金制度では、奨学生に対して経済的援助を行うのみならず、伊藤忠商事への理解を深めていただくために、伊藤忠が行なっているボランティアを含めたCSR活動や、伊藤忠の事業内容・海外オペレーションに関する説明会などへも参加をしていただき、留学生との間の交流を積極的に行っています。

2011年9月10日、奨学生52名が東京本社に集合し、伊藤忠商事の環境活動を含むCSRへの取組を学習しました。そして翌11日には、東京港野鳥公園にて社員とともに干潟整備のための竹の防潮柵づくりや海岸のゴミ広いのボランティア活動体験をしました。暑さの厳しい中での作業になりましたが、奨学生同士の交流も深まり、伊藤忠商事のCSR活動を知ってもらいたい機会にもなりました。

このような次代を担う留学生への支援活動を通じて、伊藤忠商事は留学生が大学卒業後、日本と各国の発展や関係強化に貢献することをサポートするとともに、真の「世界企業」として国際的な社会貢献を行っていきたいと考えています。



伊藤忠商事のCSRへの取組について学ぶ奨学生



公園清掃



防潮柵づくりの様子